

平成21年6月5日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17520169
 研究課題名（和文） ホイッグ・リベラリズムとバイロンの研究

研究課題名（英文） A Study on Whig Liberalism and Byron

研究代表者

門田 守 (KADOTA MAMORU)
 奈良教育大学・教育学部・准教授
 研究者番号：50204516

研究成果の概要：ホイッグを中心としたイギリス政治体制と Byron の関係を明らかにした。ホイッグには進歩的であるが、同時に体制擁護的側面があることを突き止め、Byron にも同様な政治的特性があることを示した。*The Giaour*、*The Bride of Abydos*、*The Corsair* 等の初期東方物語詩群、*The Island* という後期の詩、三つの政治演説等を分析して、彼のラディカリズムは必ず貴族的な保守主義によって抑制されていることを明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	1,300,000	0	1,300,000
2006年度	800,000	0	800,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,500,000	420,000	3,920,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：英米文学、ロマン派、ロマン主義、バイロン、ホイッグ、リベラリズム、革命、オリエント

1. 研究開始当初の背景

当初は、Byron とオリエンタリズムに関わる研究を進めていた。その中で、彼のオリエント詩は摂政政治体制下のイギリスに向けたメッセージとして読めるという見解に思い至った。そこで同趣旨の“Byron and the Anxieties of Empire: On the Role of Heroines in His Eastern Tales”という論文を書き、2005年発行の *Voyages of Conception: Essays in English Romanticism* に掲載してもらった。Byron の描くオリエントのヒロインたちが、さまざまな仕方で Byron の政治的急進性を弱める働きをしてい

ることが内容である。

また、2003年夏に Cambridge 大学で調査収集した彼をめぐるホイッグの政治家のパンフレット等を研究しつつ、Byron は結局貴族的ホイッグ・リベラリズムの潮流の中で詩作していることに徐々に気づき始めた。その後、ホイッグ体制下で Byron に影響を与えた John Cam Hobhouse、Charles James Fox、Francis Burdett、John Cartwright 等の文献を考察しつつ、Byron の *The Two Foscari*、*Marino Faliero*、*Sardanapalus*、*The Island* に見られる女性登場人物の働きや Byron の政治観を検討した。女性の発言がヒーローの行動を導

くのはなぜか、またそれが Byron の貴族的ホイッグ主義に関係があるのかを検討した。

その中で、もっと幅広く彼の詩や政治演説を研究し、Byron とホイッグ・リベラリズムの関係を明らかにする研究が必要ではないかと考えるに至った。これが研究開始当初の背景をなした。

2. 研究の目的

主にイギリス摂政政治体制下における Byron をめぐる政治的事情を調査研究し、彼の詩作品、日記、散文集等と照らし合わせて、彼がいかに貴族的ホイッグ・リベラリズムの影響を受けて作品を書き、また行動したのかを明らかにすることが研究の目的であった。

具体的には、彼の盟友 John Cam Hobhouse の政治的パンフレット、ホイッグの穏健的リーダー Charles James Fox、急進派の Francis Burdett、John Cartwright、Thomas Erskine、さらに Byron の政治的メンター Holland 卿等の著作を研究し、ホイッグ・リベラリズムの実態について調べ上げることとした。ホイッグは自由と平和、人民の味方、政治的改革の推進を標榜していたが、本質的には民衆と手を結ぶことを拒絶した貴族主義の考え方から脱することができなかった。このホイッグの性質が、Byron の革命詩において反乱が必ず失敗する現象と繋がりがあることを明確化することを目指した。

3. 研究の方法

研究の前半はホイッグ・リベラリズムの背景に関わるものであった。つまり、Byron をめぐる政治家たちの論考を研究し、彼の同時代のホイッグ・リベラリズムの性質を明らかにする手法を採った。

研究の後半は Byron の詩や政治演説そのものを中心に据えていった。*The Island* という彼の後期の作品において、反乱が成功だったのか、失敗だったのかは非常に不明確である。これに着目し、これをホイッグ・リベラリズムの観点から、結局は主人公の Torquil は不本意ながら仲間の犠牲によって生き延び、反乱は本質的に失敗であったことを明らかにしようとした。

さらに、Byron の政治演説はあまり研究がなされていない分野であったので、これをホイッグ・リベラリズムの観点から検討する必要に思い至った。いかにラディカルに政策を訴えているように見えても、Byron には貴族的体制維持の姿勢が顕著であることを検討するという方法を採用した。

4. 研究成果

最初に Byron との関わりにおいて、特にホイッグを中心としたイギリス政治体制について研究を進めた。そして Byron をめぐる政

治家たちの政治姿勢が明らかとなった。とりわけホイッグの穏健派リーダーの Charles James Fox の主要な著作を研究し、ホイッグがその政治理念として「人民の友」、「平和主義」、「自由主義」を追求していることが明確となった。

Byron の盟友 John Cam Hobhouse の政治的パンフレットについても研究を進めた。特に、彼の 1826 年 4 月 27 日の国会演説 *Substance of the speech of John Cam Hobhouse* において、彼はアメリカ革命を誉め称え、同革命が 1688 年の名誉革命に起源するものだと述べていた。名誉革命はホイッグの自主独立の精神の金字塔であり、Hobhouse は自国の自由主義を自画自賛しているのだった。ところが、Hobhouse は同じ演説の中で民衆に普通選挙権を与えることには賛同できないと踵を返した発言をしていた。彼は民衆の中には必ず財産も、自分の意志も、政治的判断力も欠く連中がいるはずなので、普通選挙権には絶対反対の意向を崩さなかった。「人民の友」であるホイッグの Hobhouse にとって、民衆を信用できないことは矛盾する政治態度なのではなからうか。同じことは、Hobhouse の 1819 年の *A defence of the people* という政治的トラクトの中で、急進派の誘いを受けた Grey 卿を擁護する文脈において、毎年開会の議会と普通選挙権はくだらぬ、意味のない、非現実なものだと発言していることにも窺われた。Hobhouse は生え抜きのホイッグであるが、民衆の意志を尊重も信用もしていない。ホイッグであることと民衆を信じないことは矛盾するはずである。

さらに、特に急進派のホイッグたち Francis Burdett、John Cartwright、Thomas Erskine の著作を研究していった。たとえば、Erskine は急進派のはずである。彼は Thomas Paine を擁護し、後に黒人解放とギリシア独立に努力する人物なのだから。しかし Erskine は 1797 年の *A view of the causes and consequences of the present war with France* というパンフレットの中で、フランス革命を非難し、民衆の完全な権利は一度に実現してはならず、改革はゆっくりがよろしく、政府は実際的なものであれと主張する。急進派と言えども、民衆の権利を全面的に擁護しているとは言い難い。ところが、Burdett や Cartwright は普通選挙権を含む民衆の権利を全面的に擁護している。ホイッグの政治観には、この貴族主義と民主主義のぶつかり合いがあることがわかった。

Byron 詩において、こうしたぶつかり合いは革命の頓挫という形で現れている。これはたとえば、*The Bride of Abydos* では Selim の蜂起の失敗という形で現れている。彼の蜂起は本質的にきわめてラディカルなものなのである。それはキリスト教徒がトルコ人に

よって蹂躪された同胞たるキリスト教徒を救い出す、自由のための闘争なのだ。ところが、Zuleika という存在のゆえに、キリスト教徒の救出という大きな目標のある闘争が、Selim による単なる恋人の獲得という個人的な小さな闘争にすり替えられてしまっているのである。そのために詩全体がラブ・ロマンスでありつつ、政治的闘争という面をもつことになる。言い替えれば、Selim による政治闘争のプロット展開と彼による Zuleika 救出のそれが絡み合っているがために、詩の急進性が著しく弱められてしまっているのだ。Zuleika をハーレムから救い出すために Selim は反乱軍を組織したのかもしれないし、それとは関係なく当初から反乱計画が独立して進行していたのかもしれない。このどちらが正しいのかを読み解く鍵は、読者には与えられていないのである。

ただ確かに言えることは、Zuleika は意図せず反乱の鎮圧に手を貸してしまったことである。反乱決行の日、Zuleika と Carasman Oglou との結婚式の日を設定されていた。Carasman Oglou は Zuleika の戦略結婚の相手であるトルコの高官である。その反乱の日の前夜に、Giaffir の軍隊が反乱軍のいる洞窟へと攻め込んでくる。Zuleika の行動は Giaffir によって監視されていたのである。Zuleika の行動はトルコ軍に筒抜けになっていて、いわば彼女がトルコ軍を導いた格好になるのである。Zuleika という女は反乱の潜在的な原因である。なぜなら、彼女を救い出すことが Selim の反乱決起の原因であることは間違いないのだから。ところが、彼女はその反乱鎮圧の手段の役割を囚らずも果たしてしまったのである。Byron の急進性は女性キャラクターによって高められ、かつ頓挫させられるようにあらかじめ仕組まれていたのだ。

Byron にとってすれば、自らが負いかねないラディカリズムの傾向をか弱き女性に託すことで、逃れることができたのである。これは急進的である姿勢を示しつつ、本質的に体制維持的な詩人の特性を明示している。

The Corsair においても、Byron のラディカリズムは、隠蔽されるようになっていく。反乱は、当初海賊たちの首領 Conrad により、Coron という港町に駐留しているトルコ軍に対して企てられていた。トルコ軍はパシャの Seyd によって率いられている。Conrad が当初トルコ軍を襲ったのは、自分たちが住むギリシアの島を守ることが目的であった。しかし反乱の後半で Gulnare が Conrad を助け、Seyd を殺害するプロット展開の中で自由と解放の価値観が書き込まれていく。反乱の指導は男から女へとその役割が託されていく。Byron の東方物語詩は、彼があくまで自由と平和を標榜しつつも、完全な意味での人民と

一体になった改革を望まなかったホイッグ・リベリズムがプロット展開を規定してしまっている。東洋の女たちは、いわば Byron が急進性に陥ることを妨げる安全装置としての役割を与えられているのである。Byron が摩訶不思議な女に積極的に反乱を指揮させたのは、彼が己に対する急進性のそしりを免れたかったからなのだ。貴族的で憂鬱な相貌をもち、他者との交流を避け、謎めいた過去をもつ Conrad は、Byron の自己劇化を施された人物である。そのような自分の現身的人物に反乱を指揮させ続けることは、己に対する急進性の批判を受ける危険性を招来してしまう。都合の悪いことは女に任せておけば、己自身の急進性を示す危険性を Byron は回避し得たはずなのだから。

Byron の詩作は、まさにラディカリズムと貴族主義の間の逡巡あるいは迷いと呼べるだろう。ことは摂政政治時代だけに及ばず、彼のイタリアを舞台にした詩劇についても同じことが言えるのである。彼がイタリア滞在期に出版した *Marino Faliero* においても、ヴェニス総督 Faliero は人民の側に立ち、革命を指揮するべきなのか、あるいは法と権威を守るあくまで王として振る舞うべきなのか逡巡する。*Marino Faliero* の出版年は 1821 年であり、1821 年とはちょうど Byron が参加していたイタリアのカルボナリ党の革命運動が頓挫した年に当たる。Byron が愛人 Teresa Guiccioli と暮らしたラヴェンナの屋敷は反乱のための武器弾薬庫と化し、彼のイタリア革命への傾倒は周知の事実であった。それにもかかわらず、*Marino Faliero* では、Byron は革命の中心 Faliero に迷いがあつたことを伝えるのである。武器弾薬庫の管理長の Israel Bertuccio に革命に加わるように言われた Faliero は、自分は本当は民衆との革命闘争に加わりたくなかったと言う。彼はあからさまに、革命軍には徒党を組んで国家を滅ぼそうとするごろつきどもが加わっていると述べる。これこそは、彼が姿勢としては革命によってヴェニスの変革を目指しつつも、やはり貴族であり、体制の転換には疑問を抱いている証左なのである。そして、予想されるように、革命はお定まりのように、反乱分子の中の臆病者 Bertram が元老院議員の Lioni に事前に計画を暴露していたことで頓挫してしまう。あたかも、Bertram は変革を止める安全装置として機能しているのである。

Byron の晩年の詩作品 *The Island* でも主人公の Torquil は Byron 本人を思わせる高貴な生まれの船員である。彼は Bounty 号という船の上で反乱に荷担し、Toobonai という島で楽園的生活を送る。しかし、イギリス追討軍によって、彼の仲間の Christian、Skyscape、Bunting が殺されるが、ただ一人 Torquil は

海中の洞穴に逃げ込んで難を逃れ、島の娘 Neuha と無事に暮らすことができる。Torquil のモデルは George Stewart であり、彼は Mary Stewart の家系まで遡る由緒正しい生まれの男である。だから、彼は貴族的人物なのである。しかも、Byron はことさらに Torquil を革命家の資質のある人間であると強調している。彼はアラブ人の中ではアラブ民族の始祖イシュマエルに、チリにおいては偉大な族長に、ギリシアにおいては革命のリーダーに、テントの中では隻脚の Timur になっていたかもしれないと歌われている。そして、そんなキャラクター化を与えられた Torquil を、Byron は最後には反乱の結果には満足していない人間として描いているのである。彼は詩の最後では何も語らない。詩の最終部の手前までは、彼は友にも恋人にもよく語る人間であったにもかかわらずである。これは自己劇化を施した人間を最後には保守的人間にしてしまうことで、Byron が自己保身を望んでいる証左であろう。

こうした Byron のイタリア滞在期の詩劇は、彼のギリシア遠征の道行きを暗示している。ギリシア遠征でさえ、ホイッグ・リベラリズムに影響を受けた行為ではあるまいか。と言うのは、Byron が与したギリシア解放の指導者は Prince Mavrocordato という人物であり、群雄割拠する 19 世紀初頭のギリシアで最も血筋の確かな高貴な人物であった。また、Byron が指揮したギリシア軍は Suliote 族というごろつき集団とさして変わらない者たちがその主力であった。高貴な人物と肩を並べ、ごろつき集団の指揮を執るのは、Faliero の生き方とまるで同じであり、ホイッグ・リベラリズムがギリシア遠征までの Byron の政治観に筋を通していたことを証しているように思われる。当然であるが、Byron は Napoleon の物真似の格好をして、石炭運搬船を改造した、スピードの出ない、性能の悪い Hercules 号に乗ってギリシア解放に向かったのである。そこには、貴族好みの救世主の演出という行為があったはずである。これもホイッグ・リベラリズムに合致する、貴族が目下の人間を救う姿勢を反映しているのである。

Byron の政治演説においては、彼が民衆の友であるが、民衆を信用しないという矛盾する傾向にあることが示されている。特に精密に彼の 1812 年 2 月 27 日の処女演説を読んでもみれば、彼がフレーム・ブレイカーたちを弁護するときに面白い表現にぶつかる。Byron は仮に民衆が暴徒であっても、われわれは暴徒に対しても義務を負うのだという論理を使う。これはいわゆるノブレス・オブリージュの思想であって、Byron は貴族の視点から民衆に同情しているだけなのである。同じような表現は、同演説の中で複数使われている。また、Byron の 2 回目の国会演説は 1812 年 4

月 21 日に行われた、アイルランドのカトリック教徒擁護演説である。これは処女演説の約 2 倍の長さがあり、複雑多岐な内容になっている。この日の夜の演説者は全部で 11 名おり、Byron は 8 番目の演説者であった。ここでの Byron の演説の特徴は、形式的にはきわめてラディカルであるが、その本質は保守的かつ体制擁護的であるという点に求められる。アイルランドのカトリック教徒の教育や信仰における点で、Byron は非常に強く彼らの権利を主張する。ただし、最終的には Byron は、アイルランドのカトリック教徒はイギリスのために役に立ちますよと締め括ってしまうのである。経済的優位性をアイルランド人に与えることや、彼らの独立に対しては、Byron は口をつぐむ。さらに、軍事的にイギリスを守るためにアイルランド人は有益な存在とも彼は言を継ぐ。こうなると、彼の演説の趣旨は貴族性の核をラディカリズムが覆った、いわゆるホイッグ・リベラリズムと呼ぶしかないであろう。

得られた成果については、国内のロマン派研究の中心をなす『イギリス・ロマン派研究』に掲載してもらった。なお、本科学研究費補助金をいただく前に、Byron とホイッグ・リベラリズムについては、既に研究をスタートしており、その成果の一部は “Byron and the Anxieties of Empire: On the Role of Heroines in His Eastern Tales”, *Voyages of Conception: Essays in English Romanticism*, 東京: 桐原書店、査読有り、2005 年、266—276 頁に掲載してもらった。これは『イギリス・ロマン派学会創立 30 周年記念論文集』でもある。よって、実質的に国内のロマン派研究の中心雑誌に二篇掲載してもらったことになる。また、国際誌にも掲載してもらっている。口頭発表についても、国際学会で二度、国内の講演に招かれ一度、また地方学会で一度、Byron を専門に研究している国内学会で一度行った。このようなわけで、国内外でそれなりの位置づけとインパクトが得られたものと思われる。

また、今後はもっと多くの Byron の詩作品をホイッグ・リベラリズムの観点から研究していきたい。とりわけ、Byron の Napoleon 讃美を中心とした英雄主義、さらには Byron が讃美する騎士道精神についても研究を進めていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

① 門田守、 “Doubtful Eye Still Creates Its Own Vision: Byron’s Island Paradises” in *Byron and the Isles of Imagination: A*

Romantic Chart, Plovdiv, Bulgaria: The Context Press、査読有り、2009年発行予定、201—19頁

② 門田守、「Byronの政治的アイデンティティ」、『日本バイロン協会会報』、査読無し、第12号、2008年、10—15頁

③ 門田守、“Byron and Eighteenth-Century Aesthetics of the Sublime”、*Language and Beyond: A Festschrift for Hiroshi Yonekura on the Occasion of His 65th Birthday*、東京：英潮社、査読有り、2007年、285—97頁

④ 門田守、“The Bounty Mutiny and Byron’s *The Island*: His Suppressed Criticism on British Imperialism”、『イギリス・ロマン派研究』、査読有り、第31号、2007年、11—23頁

〔学会発表〕（計5件）

① 門田守、「バイロンの政治的アイデンティティ」、日本バイロン協会談話会、2008年6月28日、公立学校共済組合奈良宿泊所春日野荘（奈良市）

② 門田守、“Byron’s Frustrated Revolutions and His Whig Identity”、The 33rd International Byron Conference、2007年7月11日、Venice International University, Italy

③ 門田守、「バウンティ号の反乱とバイロンの『島』—彼の帝国主義への反発について—」、日本英文学会中部支部第57回大会、2005年10月15日、愛知大学（名古屋校舎）

④ 門田守、“Doubtful Eye Still Creates Its Own Vision”、The 31st International Byron Conference、2005年8月3日、University College Dublin, Ireland

⑤ 門田守、「ホイッグ・リベラリズムとバイロン」、名古屋大学英文学会第44回大会（講演）、2005年4月16日、名古屋大学（文学部）

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

○取得状況（計0件）

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

門田 守 (KADOTA MAMORU)

奈良教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：50204516

(2) 研究分担者
なし

(3) 連携研究者
なし